

小説は微妙に揺れる人の心の裡を描く。

「別冊關學文藝」61（大阪府和泉市光明台2丁目48の47・伊奈方）浅田厚美「花火の島」。私立大学付属小学部事務員の私は47歳、人妻。中学部の同僚で11歳年下の妻子ある土屋に家から車で1時間ほどの島で行われる花火大会に誘われる。花火が大好きな私は迷った末、彼の誘いを受ける。

花火は見応えがあった。2人は次があるなら同行を約束。以後、私は頻繁にラインを送るが、土屋からの返信は間遠に。思いが募り、私はストーカーまがいの行為を繰り返す。だが翌年、彼は黙って九州の新設校に転勤してしまふ。あれから3年、私は独りで2度目の花火大会へ行つたが当然、土屋は来ない。恋愛感情が絡む2人の思いを天秤に喩え、微妙な心理描写が秀逸だ。同誌の美馬翔「キャベツ畑のサーガ第三章―花野由美の思い出」は弱小劇団を中堅にまで育てた女性を、同僚の視点で描いた秀作。

「たまゆら」119（京都市伏見区西尼崎町890の2・中川方）は、義理の關係がテーマの2作品に絞つた。原哲夫「終焉の地」。突然、義弟の

2021.01.29朝刊

同人誌

家族のあり方問う好編

所にいた夫の母が「今日から世話になるよ」とやって来た。ここが終焉の地と言つ。定年を過ぎた夫は戸惑う私に裁縫教室を続けるなど、今まで通りと言つが、義妹の悪口など何度も同じ話を耐え聞く。それから1年余り、義母は肝臓がんで逝つた。夫妻の優しさが救いの佳編だ。

梅本修一郎「明日葉」。私と妻は今治に住む妻の両親を訪ねる。義父は部屋にこもり認知症気味。意に染まぬと義母を威高に怒鳴る。私は義母だけでも子どもたちが暮らす関西に戻ることが勧める。それから2年、義母は戻つたが具合が悪い義父も引き取るため妻と義妹は今治に向かう。2人を見送つた帰り、かつて義父とうまくいかず私とも喧嘩別れのままだった妻の兄を訪ねてみるが、やはり蟠りは消えない。そんな私はへ線路が途切れて、その先に広がる広漠たる曠野で呆然としている夢を見た。家族のあり方を問う好編だ。
「玉藻」7（神戸市西区宮下3の21の3・黒田方）。この雑誌はエッセイ誌だが、コロナ禍がテーマの黒田はるみつ「逆境を逆手に」と榎崎秀子「コロナマスク大作戦」が印象に残つた。
（野元 正・作家）

